

# From Working Girl to Heiress: Laura Jean Libbey's Dime Novel Romances

Yoshiko Yamaguchi

In her lifetime Laura Jean Libbey (1862-1924) produced more than eighty melodramatic romances, and sold between 10 and 15 million copies. Her novels were first serialized in such popular story weeklies as *The Family Story Paper* and *The Fireside Companion*, then printed as dime novels, and eventually reprinted in such paper-covered series as *The Hart Series* and *The New Eagle Series*. *The Laura Series*, consisting only of her works, were even published by Street and Smith, one of the five major dime novel publishers, thus showing the enormous popularity she enjoyed. A number of her heroines were New York working girls, as were her main readers. One of the two purposes of this paper is to trace the literary influences that caused Libbey to produce these stories, in which the poor, underpaid working girl suddenly becomes an heiress, and struggles through a chain of crises in order to marry a rich, handsome man at the end. The other purpose is to consider how and why her working-girl readers accepted such melodramatic stories. By analyzing some of Libbey's working-girl stories and other novels and autobiographies of the period, I hope to demonstrate these influences, as well as the reasons for the public's reception of these stories.

Key Words: Laura Jean Libbey, Working Girl, Dime Novel, Melodrama, New York

## ワーキングガールから遺産相続人へ ——ローラ・ジーン・リビーのロマンスをめぐる——

山口ヨシ子

### I. ベストセラー・リストに載らないベストセラー作家

ローラ・ジーン・リビー (Laura Jean Libbey, 1862~1924) は、19世紀後半から20世紀初頭にいたるアメリカで、大衆に広く支持された作家であったが、ベストセラー・リストにその名前を見いだすことはできない (Mott 10)<sup>1)</sup>。生涯に80冊以上のロマンス、いわゆる現実離れた恋愛小説を書き、年収が17600ドルにも達するほどの流行作家として新聞などで宣伝されていたが、そのうち1冊たりともベストセラーを記録することはなかった (Noel 152)。1905年の統計で、男性労働者の平均年収が440ドル、女性労働者が273ドルであったことを考えれば (Wertheimer 214)、リビーがいかに高給取りの「売れっ子作家」であったかは明らかになる。事実、生涯をつうじて、1000万部から1500万部を売りつくしたといわれている (Cox 158)。彼女は、特定の作品によってではなく、いわば書いた小説すべてが満遍なく売れたという意味でのベストセラー作家だったのである。

リビーの小説を支持したのは、おもにその年収が彼女の60分の1にも満たない女性労働者であった。自らは、ブルックリンの医者の子で中産階級の出身であったが、彼女は「大衆のために書く」と宣言し (Papashvily 199)、40年以上にわたって労働者階級の人びとに娯楽としての小説を提供し続けた。1880年から1920年にかけては、移民一世、二世の若い女性たちがアメリカの労働市場を圧倒し、1900年代はじめのニューヨークでは、16歳から20歳の女性のほぼ6割が賃金労働についていたといわれるが (Peiss 35)、リビーは、当時の労働市場を支えていた、「ワーキン

グガール」と呼ばれる、若い未婚の白人女性労働者をおもな読者とする小説を書いたのである。

薄給のワーキングガールに娯楽としての読物を提供するというのであれば、安価であることが絶対条件であろう。リビーの小説は、まず、1部5、6セント、年間購読料3ドルの『ファミリー・ストーリー・ペーパー (The Family Story Paper)』や『ファイアサイド・コンパニオン (The Fireside Companion)』など、「ストーリー・ウィークリー (story weekly)」や「ストーリー・ペーパー (story paper)」などと呼ばれる週刊の物語新聞に連載された (Cox 158)。これらの新聞は、その名前が示すとおり家族向けであり、8ページの紙面には、冒険小説、ウェスタン小説、歴史小説など、家族全員が楽しめる多様な読物を5編から8編連載し、休日や職場における読書の素材を提供していた (Denning 11; Enstad 34)。若い女性向けのリビーの恋愛小説もそのような紙面の一角を占めていたのである。

発行部数、数十万部のこれらの新聞は (Denning 11)、少なく見積もっても、発行部数の数倍の読者がいたと思われるが、掲載された小説の多くは、安価で携帯に便利なペーパーバック版、いわゆるダイムノベルの形で出版された後、叢書として再刊され (Denning 12)、さらなる読者を開拓していた。出版社にしてみれば、新聞を読み損ねた読者や、職場で話題となった物語を読みたい読者などの要求に応えることを名目に、本の購入を習慣化させて販売活路を拡大しようとしたわけだ。リビーの小説も、『ニューイーグル・シリーズ (The New Eagle Series)』や『ハート・シリーズ (The Hart Series)』などに組み込まれて再版を重ねた。アメリカを代表するダイムノベル出

版社の一つで、とくに女性向けロマンスの出版に力を入れていたストリート・スミス社 (Street and Smith) は、1903年には、『ローラ・シリーズ (The Laura Series)』と銘打ってリビーの小説だけを出版するに至っている。薄給の女性労働者を考慮したビジネス戦略はつねに考慮され、たとえば、『ハート・シリーズ』は、1冊20セント、6冊1ドルというような売り方もされていた。リビーの小説も、1896年には、9冊50セントで売りだされ (Enstad 34)、出版界での薄利多売が実践されていたのである。それはまた、小説が当時のアメリカにおける消費文化の一翼を担っていたことの証でもあろう。

リビーは、週刊新聞に数ヶ月連載した後に単行本として出版するというパターンにのっかって小説を量産したが、その内容もきわめてパターン化されていた。16、17歳の若い娘を主人公とする恋愛小説であり、幾多の障害を乗り越えて結婚にいたる筋書がくり返し書かれた。彼女自身の言葉に従えば、「深いロマンスと哀感が脈打つ、純粋で明るい若者の恋愛小説」(Papashvily 199)ということになる。とくにワーキングガールを主人公とする物語では、家庭の事情で自活しなければならなくなった美少女が、働きにでて階級をこえた恋愛をめぐる苦勞するものの、その後、とつぜん遺産を相続することになり、最終的には、愛も富も地位も手に入れる筋書になっている。

本稿では、リビーの小説のうち、ワーキングガールを主人公とする小説の第一作である『レオニー・ロック 美しいニューヨーク・ワーキングガールのロマンス (Leonie Locke; or, The Romance of a Beautiful New York Working-Girl)』(1884)を中心に、このような小説がどのような影響のもとに生みだされたかを検証してみたい。さらには、同時代の小説や自伝などを手がかりに、厳しい労働に長時間耐えていたワーキングガールにどのように読まれ、受け入れられていたかについても考えてみたい。

## II. 新しいジャンルの小説の誕生まで

リビーは、1880年代、90年代だけで60編以上

の小説を「生産した」とされるが (Peterson 20; Enstad 42)、とくにワーキングガールを主人公とした女性労働者向けの恋愛小説群は、新しいジャンルを形成しているといえるだろう。女性が働くことを積極的に肯定し、ワーキングガールが金持の男性と結婚するまでを描いた恋愛小説はそれ以前にはなかったものであり、そのジャンルに「ローラ・ジーン・リビーもの (Laura Jean Libbeys)」という名さえ付けられている (Peterson 20)<sup>2)</sup>。自らワーキングガールの世界に潜入体験して『長い一日 ニューヨーク・ワーキングガールの物語 (The Long Day: The Story of a New York Working Girl)』(1905)を書いたドロシー・リチャードソン (Dorothy Richardson) は、そのなかでリビーを「くだらない小説を書く有名作家 (a well-known writer of trashy fiction)」(81)と呼び、その作品を女性労働者に悪影響を及ぼすものとして切り捨てている。『ニューヨーク・ヘラルド (The New York Herald)』紙の記者であったリチャードソンの意見は、当時の中産階級層の意見を代弁するものといえるが、女性労働者に娯楽を提供したリビーの小説は、20世紀に入り映画産業が参入するまで、出版産業が労働者階級の文化を助長し、利用する形で、隆盛を誇っていたのである (Howe 521)。

労働者階級の女性向けの小説が人気を博し、小説の出版が産業として発展した背景には、賃金労働につく女性の数が急増したというアメリカ社会の変化がある。南北戦争で戦死した50万人の穴を女性労働者が埋めたばかりでなく、戦争後、工業化が急速に進むなかで、それまで訓練を受けた男性が行っていた仕事を未経験の女性がより低賃金で担うようになったのである (Hapke 1-2; 野口 198-272)。工場における低賃金労働の需要はとくにニューヨークなど大都市に集中し、製造工場働く女性の数は、1870年から1910年の間に6倍に増えている (Hill 45)。「黒人」女性はこのような工場労働から締めだされ「家政婦」などの仕事にあたっていたため (109)、そのほとんどは白人であった。「アメリカには若い娘に仕事がある」として女性移民の流入が記録的に増え (Hapke 2)、1900年の統計では、工場労働に従事

する女性の58パーセントが移民一世か二世で、親もアメリカ生まれという、いわゆるアメリカ人が占める割合は、39パーセントであった(Aron vxii)。リビーの小説は、おもにニューヨークやその近郊が背景となっているが、その主要読者は、低賃金で長時間の単純労働に耐え、アメリカ経済の発展をその底辺で支えていた白人の女性都市労働者だったのである。

リビーの小説がそれ以前の女性労働者を描いた物語と異なる最大の特徴は、女性が賃金労働に就くことを礼賛しつつ、ワーキングガールの文化に同調している点であろう。エイドリアン・シーゲル(Adrienne Siegel)の研究でも明らかなように、労働者階級の女性が大衆小説にとりあげられた例はリビー以前にもすくなくないものの、その多くが働く女性を受動的な犠牲者として描いている(91)。ニューヨークで働く女性の小説にとりあげられた例としてすぐに思いつくのは、エドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe)の「マリー・ロジェの謎(“The Mystery of Marie Rogêt”)(1842)のような、実際に起こったメアリー・シシリア・ロジャース(Mary Cecelia Rogers)失踪事件をもとにして書かれた「タバコ売りの娘」に関するものである。だが、ポーのマリー像でも明らかなように、当時「売春婦」の婉曲的表現だった「タバコ売りの娘」(Siegel 81)のセクシュアリティをセンセーショナルに描いて読者の関心を誘うのが目的で、リビーの小説にみられるような、女性労働者が称えられるという姿勢はなかったといえよう。

賃金労働につく女性の価値を高らかに謳う大衆小説の出現には、やはり活字メディアの功績が大きかったようである。1855年には、『ニューヨーク・トリビューン(*The New York Tribune*)』紙が「お針子」の労働状況についてのスクランダルを暴露し、ワーキングガールへの擁護を宣言したという(Enstad 38)。「卑劣な上役」と「女性犠牲者」というステレオタイプの対立を描いた記事の数々は、センセーショナルな扱いに終始しているものの、女性賃金労働者への社会的関心を高める強力な要因になり、1860年代には、安価な日刊新聞(penny press)や週刊新聞などが競つ

て「かわいそうなお針子」を擁護する記事や物語を掲載したといわれる(Enstad 38)。

『ルース・ホール(*Ruth Hall*)』(1852)で子どもを抱えた主婦が作家として自立するまでの軌跡を描いたファニー・ファーン(Fanny Fern)も、1867年には、サラ・ペyson・ウィリス(Sara Payson Willis)という本名で、女性労働者への援助を訴えるためのエッセイ「ニューヨークのワーキングガール(“The Working-Girl of New York”)」を書いている。そこには、「耳をつんざくような機械の騒音」(1743)のなか、自ら機械のようになって長時間働かされ、健康を害し、若さを消耗している女性たちの惨状が厳しい迫力をもって描かれている。このエッセイは、「悩み疲れた」粗末な着衣のワーキングガールが、夫の「主要な装飾品(chief ornament)」としてその経済的「武勇さ(prowess)」(Veblen 180, 246-75)を誇示する役目を担った上流階級の優雅な女性と同じ歩道を歩く現実を指摘し(Willis 1742)、資本主義経済のなかで著しい格差が生じていたニューヨークを、とくに女性の実態に焦点をあてて描写している点で画期的であったといえよう。

1870年代には、女性労働者に「気高い」イメージを付したという意味で、リビーの物語につながる重要な物語が誕生している。のちに『ローラ・シリーズ』を出版することになるストリート・スミス社の創始者の一人フランシス・S・スミス(Francis S. Smith)が、1871年、自紙『ニューヨーク・ウィークリー(*The New York Weekly*)』に連載した「バーサ、ミシン踏み娘(“Bertha, the Sawing Machine Girl”)」である。「私たちの気高いワーキングガール(our noble working girls)」(Noel 277)という視点を示したこの物語は、70年代の物語新聞を同様の物語であふれさせる契機となったばかりでなく、演劇界にもワーキングガールを進出させ、「踏みにじられた針の奴隷(the down-to trodden slaves of the needle)」(Noel 278)だったワーキングガールを文字どおり表舞台に立たせることになった。連載終了後の8月7日、ニューヨークのパワリー劇場で初演を迎えた「バーサ」は、その後30年以上にわたってアメリカ全土で人気の演目とな

り、中産階級向けとは明らかに異なる、労働者階級向け演劇の一ジャンルの端緒を開いたのである (Denning 186)。

スミスは『ウィークリー』で「貧しい人や抑圧された人の不正な扱いや苦しみを「生きた言葉で」描き、「目の当たりに見るように人物を描写する」と宣伝されていたが (Noel 109)、そのバーサ像は、チャールズ・フォスター (Charles Foster) によって脚色されても異彩を失うことはない。生き生きとしたバーサ像を際立たせているのは、不正に利益をむさぼる雇用者側と対決できる彼女の「強さ」であり、「声」である。彼女は不当な扱いをする雇用者の息子に対して、「正直なワーキングガールであること」が「比類ないほど名誉ある肩書きである」(Foster 192) と述べ、同等に張り合う。このような誇りの源は、「不当な低賃金で働き貧しいけれども、ワーキングガールはこの国を偉大にした父祖たちの独立精神を受け継いでいる」(192) という彼女の「独立宣言」に表れている意識である。高価な物質をおとりにセクシャル・ハラスメントに及ぼうとする男性に対しても、「恥知らずな臆病者」と罵り、「悪党」に触られて汚されない「ただのワーキングガール」の気高さを堂々と訴えている (192-93)。この劇は、のちに「古典のお涙頂戴劇」(Noel 278) と評されたといわれるが、涙よりも、1日12時間も低賃金で働かされている女性が、毅然として自分の考えを述べる姿が際だっている作品といえよう。

リビーの小説に直接影響を与えたと思われるのは、マイケル・デニング (Michael Denning) が指摘するとおり、孤児が機械工となりストライキを勝ち抜く姿を描いたフレデリック・ウィットィカー (Frederick Whittaker) の『ラリー・ロック 鉄の男、富への戦い、労働と資本の物語 (Larry Locke, Man of Iron, or, A Fight for Fortune: A Story of Labor and Capital)』(1884) である (185)。『ビードルズ・ウィークリー (The Beadle's Weekly)』紙におけるこの小説の連載が終了した3ヵ月後に、リビーの『レオニー・ロック』の連載が『ファイアサイド』紙で始まっていることや、主人公の姓が同じであることからして

も、リビーが労働者を主人公にすることを模倣した可能性は高く、レオニーは「ラリーの妹」ともいえるだろう (185)。ラリーの物語は、誠実な労働者の権利を守ろうとする苦労が中心であり、リビーの小説にはみられない、労働組合運動を扱った、いわゆる「労働騎士団」<sup>3)</sup>の物語である。だが、「アメリカにおいてさえ、法律はつねに貧しい者より富める者に味方している」(173) というラリーの発言に集約される労働者階級への共感 は、リビーの小説に共通するものである。デニングによれば、『レオニー・ロック』が連載された後、20年以上にわたって『ファイアサイド』や『ファミリー』の紙面には、さまざまな作家によるワーキングガールの物語が次つぎに連載されたという (185)。まさに、リビーの『レオニー・ロック』は、一つのジャンルの先がけとなった作品といえよう。

リビーの小説に影響を与えたジャンルとして無視できないのは、当時、ヨーロッパからアメリカに大量に流入していたロマンスである (Enstad 40)。リビーの小説は、金と愛をめぐる展開し、主人公の経済的・社会的地位の変化がとつぜん起こるが、このような要素は、シャーロット・M・ブライム (Charlotte M. Braeme) などのロマンスに通じている。ブライムは、『長い一日』で女工たちの気に入りの作家としてリビーとともに指名されていることから、当時、ニューヨークの女性労働者の間で高い人気を誇っていたことがわかる。たとえば、尾崎紅葉の『金色夜叉』の藍本ともいわれるブライムの『女より弱き者 (Weaker Than a Woman)』を例にとっても (堀 188-201)、労働者階級の女性が描かれることはないものの、若い女性が金・地位・愛をめぐる悩み苦しむという点ではリビーの小説に共通している。ブライムの小説は、リビーの小説にも力を入れていたストリート・スミス社が、のちにバーサ・M・クレイ (Bertha M. Clay) という筆名でそのパターンを継承して量産し、アメリカの読者拡大に努めたという経緯がある (Cox 39)。ブライムの小説がリビーに与えた影響は少なからずあったとみる方が自然であろう。

また、当時、ニューヨークのユダヤ人移民の間

では、ショーマー (Shomer) という作家によるロマンスが広く読まれていたといわれるが、そのプロットはリビーのロマンスに酷似している (Bisno 49)。ショーマーの作品は、フランスのロマンスを、おもに東欧系のユダヤ人が使用していた言語イディッシュに翻訳し、固有名詞や習慣などをユダヤ人のそれに変えたものだという (49)。国際著作権法によって作品が保護されることなかった時代であり、出版社が人気のプロットを作家に紹介することもあったことからすれば (Enstad 35)、リビーの作品がヨーロッパのロマンスに似ていたとしても不思議はない。一つのヒットが生まれると同様の物語を出版社が作家に依頼し、工場で製品を生産するように次つぎと同じパターンの物語が書かれ、製品となった物語がさらに類似品を生み出すという形でロマンスが増産され、土地の名前や習慣などを変えて世界で流通していたといえよう。

大衆向けの読物として、ロマンスが流行するようになった背景には、1873年のコムストック法 (The Comstock Law) によって猥褻で俗悪な印刷物の郵送が禁止されたことも影響したとみることができる (Enstad 43)。労働者階級向けの出版業界が、中産階級の批判をかわず手段として、ならず者、犯罪、流血などを扱ったダイムノベルから、恋愛ものに力点を移すことによって、より健全なイメージをアピールしようとしたのである (43)。このような時代の風潮は、1873年に、『今日の娘たち (*Girls of Today*)』というタイトルの、アメリカ初の労働者階級の若い女性向けのストーリー・ウィークリーが、ダイムノベルの老舗ビードル社 (Beadle and Adams) から創刊されたことにも表れている。その週刊新聞の宣伝には、「ロマンスと現実を写す鏡、愛と心の生活を写し、情熱、情感、感動を描く」「アメリカの若い女性自身の新聞」(Carr 1; Johansen 470) とある。リビーの小説は、大衆出版業界が女性読者を開拓しつつあった時代の風潮のなかで生まれたといえよう。

リビーの小説に影響を与えた作家として最後にあげなければならないのは、当時のアメリカで広く読まれていた女性作家、とくに E・D・E・N・

サウスワース (E.D.E.N. Southworth) である。サウスワースは、リビーが生まれるはるか以前に、『ニューヨーク・レジャー (*The New York Ledger*)』紙を人気の物語新聞にしたロバート・ボナー (Robert Bonner) に見込まれ、以後同紙に次つぎと作品を発表して高給を得ていた。その代表作『見えざる手 向う見ずな娘キャピトーラ (*The Hidden Hand: or, Capitola the Madcap*)』が、1859年に連載されて以降、1888年に単行本として出版される前に、1868-69年、1883年とくり返し連載されていたことは特筆すべきであろう。偶然の出会い、誘拐、監禁などによって次つぎとアクションを生みだし、物語を遅延させるサウスワースの『見えざる手』における手法がそのままリビーの小説に継承されているからである。とくに、リビーの『可愛い向う見ずな娘ドロシー (*Pretty Madcap Dorothy*)』(1891) では、「向う見ずな娘」というヒロインの性格設定ばかりか、ニューヨークで働いていたヒロインがヴァージニアの旧家の遺産相続人になるというプロットまで、サウスワースの『見えざる手』に酷似している。サウスワース自身がどのような影響を受けて作品を書いたかについては、明らかにされるべき別の問題ではあるが、彼女からリビーへの影響はたしかにみられるのである。

1880年代、二人は一時ともに『レジャー』紙に物語を寄稿していたが、リビーより40歳以上年長のサウスワースは「大衆を喜ばせ、文化人も満足させる」ことを目指し、若いリビーは「大衆のために書く」と宣言していた (Papashvily 199)。作家自身の目標の違いはその作品に端的な差を生みだし、労働者階級の読者のみを対象にしていたリビーの物語は、労働者階級のみならず中産階級の読者をも射程に入れていたサウスワースのそれよりはるかに単純化されている。ニナ・ベイム (Nina Baym) は、その著書『小説、読者、批評者 (*Novels, Readers, and Reviewers*)』において、サウスワースの作品を「きわめて手の込んだ小説 (highly wrought fiction)」と呼び、その現実離れたメロドラマ的要素などを指摘して、女性の日常生活を仔細に描いた「家庭小説」のアンチテーゼとしている (208)。リビーは、サウス

ワースの作品にみられるその現実離れしたメロドラマの要素をいっそう強調し、より平易なプロットと文体で、より短い物語を書いたということができよう。サウスワースからリビーへの移行は、大衆小説市場がより大衆化したことであり、中産階級の読者向けの「家庭小説」が衰退しつつあったことを示しているといえるだろう。

女性月刊誌『ゴディーズ・レディーズ・ブック (*Godey's Lady's Book*)』の編集長サラ・ジョセファ・ヘイル (Sarah Josepha Hale) は、当時の中産階級の価値観を代弁する人物とみることができるが、サウスワースの作品を「無礼ともいえる、乱暴でとっぴな作風で書かれている」と批判していた (794)。だが、このような批判を受けながらも、サウスワースは、中産階級の読者を満足させる努力を怠ることなく、キリスト教の信仰を糧に家庭問題に耐え抜く自己犠牲的な女性を描き、「家庭小説」の読者の願いともいえる「慣習に従うヒロインを渴望する大衆の願い」 (Dobson xxxiv) をもかなえてもいた。そのような試みは、活動的な女性を主人公に据えた『見えざる手』においてさえ、複数の女性キャラクターによってなされている。

一方、リビーの作品には、手法や人物設定などにサウスワースの影響が強くみられるものの、「家庭小説」の読者の願いをかなえるような部分はなく、キリスト教の信仰を糧に自己犠牲的な生き方をする女性は登場しない。リビーの小説は、サウスワースの作品にみられるセンセーショナルな部分を引き継ぎつつ、労働者階級の女性の文化を肯定する姿勢を前面にだしたものといえるだろう。サウスワースの『見えざる手』を高く評価していたボナーは、1886年、サウスワースに力が衰えたことを伝える手紙を送る一方、リビーには、その小説にくり返しが多いことを批判する手紙を送っている (Papashvily 198-99)。その批判を受け入れることができなかったリビーは、『レジャー』紙を去ったが、同様のプロットによるパターン化されたリビーのロマンスがその後数十年にわたって大衆に支持されたことは、「家庭小説」の時代が終り、労働者階級の読者がより増えたことを示しているといえるだろう。

### Ⅲ. 成功物語におけるジェンダーと階級

リビーの物語は、主人公が苦勞の末に望みどおりの愛を成就させて終るという意味で、成功物語とみなすことができる。「ヒロインの苦闘と勝利 (the "trials and triumph" ... of a heroine)」を一貫して描いている点では、ペイムが「女性小説 (Woman's Fiction)」と呼んで読み直しを試みた、「家庭小説」や「感傷小説」など、つまり、1860年以前の女性作家による、女性についての女性のための物語と変わるところはない (22)。だが、現実離れしたリビーの恋愛小説が、女性の日常生活を詳述した、それ以前のおもに中産階級層を対象とした「女性小説」と大きな違いを示していることも事実で、中産階級の女性観を一部で反映しつつ、労働者階級の読者を配慮した内容になっているといえるだろう。それは、「女性小説」にみられた感傷的な部分を継承しながら、ワーキングガールの視点に立った物語と言い換えることもできるだろう。

また、リビーが描いた「ヒロインの苦闘と勝利」は、同時期の男性を主人公とする男性作家による成功物語とも顕著な違いをみせていることは確認されなければならない。真面目に働いて生計を立てる美德を謳う姿勢は共通しているが、いかに成功を獲得するか、何を成功とするかという点で、ジェンダーによる差異を示しているのである。その差異とは、男性作家による男性を主人公にした成功物語が努力を成功の鍵としているのに対して、リビーの描いたヒロインには、努力は重要な要素となつてはいないということである。さらには、前者が勤勉な労働による社会的・経済的地位の向上を成功としているのに対して、後者は、偶然の出会いやとつぜん舞い込む遺産によって富・地位・愛を手に入れることを成功としているということである。

19世紀のアメリカで大衆に広く読まれた成功物語といえば、浮浪児が努力によって成功の階段をのぼるホレイション・アルジャー (Horatio Alger) による『ぼろ着のディック (*Ragged Dick*)』 (1867) に代表されるダイムノベルがまず想起されよう。『ディック』では、運が作用して

いるものの、主人公のディックが「自分だけを頼りに自分を最大限活かす決意をし」、「努力し続ける忍耐力」によって一步步社会の階段を上昇することに重きがおかれている(166-67)。ディックは、中産階級のプロテスタント的価値観にもとづいた、「独立独行人 (self-made man)」の理想を実現するべく、貧困からの脱出を個人的な努力によって達成しているといえるだろう。

ウィットイカーの『ラリー・ロック』も、ディックの物語と同様に、個人の努力が成功を獲得する重要な鍵となっている。この作品は、孤児院育ちの少年が苦労の末に職工長にのぼりつめるという成功物語であるが、「一生懸命働くことで真面目に生計を立てる」(170) ことが美德とされ、「この国では誰でもなりたいたいものになれる」(166) という精神が強調されている。ラリーは、ディックの物語のように、貧困を個人の問題だけに終らせることなく、弱者の労働を搾取する社会システムを問うべく、仲間とともに闘う労働運動に発展させて解決しようとする点において一段と労働者階級の視点に近づいている。ストライキによる社会改革を試みている点で、中産階級の個人主義的理想の押しつけは弱まり、より弱者の味方に立ってはいるが、それでも個人的な努力は依然として成功への重要な条件でもある。ラリーは、夜学に通って基礎となる学力の向上に努め、物語の終りには話す言葉さえ、改善されているのである。

一方、リビーの物語では、勤勉な労働によって生計を立てる美德は言葉としてくり返されるものの、真面目な仕事上の努力が成功の鍵として示されることはない。主人公が社会的成功を目指して、自らを向上させようと努力することもない。たとえば、『レオニー・ロック』のヒロインは父親が病気になったために、経験不問の毛皮縫製の仕事に応募するが、数百人の応募者から一人選ばれている。他の応募者からは、美人ゆえに合格したのだと嫉妬をかうが、彼女はつねに周囲の嫉妬を買うほど「完璧な」存在である。結婚という「成功」を手に入れるのも、最適の男性に「発見される」ことにかかっている (Peterson 24)。『アイオーネ こわれた愛の夢 (Ione: A Broken Love Dream)』(1887) においても、男性が女性

を愛していれば、女性の目の前に現れて求愛をするという、女性にとっては受動的な成功の概念が示されている (80)。リビーのワーキングガールは、おもに通勤途中の路上などで、富と地位をもつ運命の人に「発見されて」成功への道を歩んでいる。結婚までに起こる障害が、女性としての「完璧さ」を証明する機会であり、手段となっているのである。

労働者階級の女性向けの物語で、労働を賛美しながらも、労働によって上昇することではなく、主人公が金持の男性の視線にとまり、家父長制の枠組みに取り込まれる結婚を成功としていることは、とくに中産階級の価値観が適用されていることでもある。実際、19世紀のアメリカで中産階級の女性に求められた、信仰深く、性的に純粹で男性に従順、かつ家庭的とする「真の女性」(Welter 152) の価値観は、きわめて変則的ではあるが、リビーの小説を支配しているのである。

「真の女性」の「美德」のうち、リビーのヒロインに変則的に表れているのは、一つには、女性は家庭的であるべきという価値観である。家庭的であることを理想としていながら、家庭の外で活躍するという状況が描かれているのである。ヒロインは、一家の窮地を救うため、または、自ら生きていくためにワーキングガールにならざるを得ない状況にあるが、その独立心を一貫して称える作品のスタンスは、女性の「適切な領域」を家庭とする中産階級の価値観と齟齬をきたしている。苦境を打開するために工場で賃金労働に挑むばかりでなく、アクション小説さながらの誘拐や監禁の連続に耐え、したたかに生き延びるヒロインは、たしかに家庭的ではいられない。ヒロインが家の外で事件に次つぎ遭遇する展開は、中産階級向けとは異なる労働者階級向けの小説の特徴とされ (Mitchell 151)、同時期の男性向け労働小説における殴りあいなどに代るものともいわれているが (Denning 193)、リビーの小説では、家庭内の些事や女性の内的葛藤などが描かれることはなく、おもに物事は屋外で進行する。『ただの機械工の娘 愛と情熱の魅惑的な物語 (Only a Mechanic's Daughter: A Charming Story of Love and Passion)』(1892) では、ヒロインが、「考え

ることは行動すること」(56) を実践する性格であるとさえ説明されている。最終目的地は家庭であり、夫に保護される生活であるが、そこに到達するまでの逆境を乗り越えるヒロインは、家庭の保護が必要ないほど強さや勇気を発揮するのである。

男性に従順であるべきという価値観も、リビーのヒロインには、同様に変則的に表われている。愛する男性には従順であるが、力で迫る男性にははっきりと拒否できる声をもっているという意味においてである。たとえば、『レオニー・ロック』においても、ヒロインは、のちに夫となる男性には、「天使」や「小さな子ども」でしかなく、彼の提案にはおおむね「黙って従う」(13)。「発見される」経緯同様、出会って恋に目覚める経緯も男性主導である。その一方で、セクシャル・ハラスメントを働く職工長には、「あなたの存在そのものが汚れている」(12)と怒りをもって言い切り、「貧しい、身寄りのないワーキングガール」(17)を侮辱する罪を堂々と告発する勇気をみせる。愛する男性に対する「おずおずした」(221)様子とはかけ離れた強さを発揮しているのである。

リビーのヒロインは、純粹さなくしては、その資格がない。性的に純粹であることが最大の美德とされ、ヒロインは、家の外で厳しい身の危険にさらされながらも、無垢であり続ける。厳しい労働には不向きと思える小さな手足をもつ、小柄なか弱い十代の女性で、「冷たい世間」に一人で立ち向かう「無力で」「不運な」孤児という構図が強調されているが、彼女は次つぎに襲ってくる敵役の襲撃にも純潔を守りとおしている。「真実の愛への道は決して平坦ではない」(『可愛い向う見ずな娘』253)<sup>4)</sup> ことを実証するかのようになり、葉や偽文書を使った「強制された結婚」によってさえも、「汚される」ことはない。「真の女性」の理想は、レイプされることが必至の状況でも純潔を守りぬくことで実現されているといえるだろう。

このようにヒロインが「無垢で」「純粹な」「真の女性」であることがくり返し強調されることは、現実社会でワーキングガールがいかに危険にさらされているかを示すことでもある。または、

社会の人びとがワーキングガールの純潔性をいかに疑っているかを暗示していると言い換えることもできるだろう (Kessler-Harris 75)。いずれにしても、主人公の絶対的な純潔性は、ロマンスゆえに可能になる現実との距離感と呼べるものである。スティーブン・クレイン (Stephen Crane) の『マギー 街の女 (Maggie: A Girl of the Streets)』(1893) のリアリズムに拠るまでもなく、実際、ワーキングガールのなかには、貧困などから売春婦にならざるを得ない例も多々あったといわれ (Riis 176)、社会改革の大きな課題でもあったからである (Smith-Rosenberg 109-128)。

リビーのヒロインが闘う冷たい世間は、職場の上役や、上流階級出身の恋敵や恋人の親などであるが、彼らによってもたらされる危険は、とくに自分の思いを力によって達成しようとする男性による誘拐・監禁に集約されている。ここにみられるのは、男性が経済的・権力的・身体的に優位であることを悪用して、女性のセクシュアリティを襲撃する構図である。それはまた、無力なワーキングガールが資本家に搾取されるという社会的構図のアレゴリーととらえることもできよう (Enstad 37)。

19世紀の中産階級の女性には、信心深いことが「真の女性」のもっとも重要な美德として要求されたが、リビーの小説では、宗教の問題は不問に付されていると言ってよい。キリスト教への信仰を軸にした、「家庭小説」や「感傷小説」のような筋書きはまったくなく、もっとも重要な価値観は、金銭や階級をもこえ得る異性愛への信仰である。「愛はすべての階級をこえる」「金よりも愛」をモットーに、貧しいワーキングガールのときに、富と地位をもつ男性に見初められることが重要なポイントとされている。身分や貧富の差をこえた「真実の愛」が存在することがくり返し語られ、それが神の意志であるとばかりに「運命」という語の頻出によって説明される。「神が保護者のいないワーキングガールの面倒見てくださる」(18)とは、窮地に陥ったときのレオニーの叫びであるが、この姿勢がリビーの作品を支配しているといえよう。

リビーの小説では、宗教ばかりでなく、政治もまったく排除されている。ワーキングガールの労働状況は、ウィリスの記事にもあるように、深刻な社会問題であり、人権問題でもあったが、厳しい労働現場が詳述されることも、堅実な改善案が提示されることもない。アメリカにおける労働運動は、プロテスタント、カトリック、ユダヤ教など、異なる宗教を信じる労働者が団結することやそれぞれの宗教の教義との摺りあわせに困難さがあったといわれ、労働運動を扱った大衆小説も、労働者の集会が爆発された1886年のハイマーケット事件など現実の社会状況への懸念からその流行が短命に終わったという(Grimes 14)。雇用者と被雇用者が、「ボスと奴隷の関係でなくなるまで」(325)と言って、工場主になるよりも職工長であることを選ぶラリーを描いたウィットィカーも、すぐにウェスタン小説など他のテーマを書くに至っている。ウィットィカー同様、リビーも、大衆を喜ばせ金を稼ぐために書いていたとすれば、宗教や政治という複雑な問題を物語から排除したことは、きわめて賢明な選択であり、それゆえに彼女は流行作家であり続けることができたといえるだろう。組合運動につながる女性同士の連帯を描くこともなく、『レオニー・ロック』でも、「困難なときにいつもまっさき敵対するのは同じ女性である」(21)という姿勢のもとに、ヒロインを苦しめる過激な悪女を描いている。リビーのような作品を書こうとしたある作家は、「政治と宗教を避けよ」と編集者から忠告されたという記録もある(Enstad 43)。

ワーキングガールのおかれた状況を改善するために、リビーが示した唯一最大の策は、ワーキングガールを有産階級の男性と結婚させ、それを神の意志としたことである。リビーの作品にみられるメッセージを要約すれば、「神の意志に従って金持は貧乏人と結婚するべきである」ということになる。社会を再構成するには、神の意志に拠るしかない、という消極的な改善策といえるが、『レオニー・ロック』では、運命の逆転が、富めるヒーローにも、貧しいヒロインにも同様に起き、誰にでも起こり得ることを印象づけている。

貧乏であることを怠惰の証とみる中産階級の批

判をかわすためか(Kleinberg 123)、リビーのワーキングガールは多額の遺産を相続することで階級を飛びこえるため、階級をこえた愛の理想は、結局は実現されることはない。ワーキングガールの気高さは、上流社会に入っても見劣りすることはないが、そのような資質は、結果として、出自によるものであることが明らかになる。「ただのワーキングガール、労働の騎士の娘にすぎないが、上品なプリンセスの優雅さをそなえている」(10)と描写される『アイオーネ』のヒロインも、遺産相続人となることで、その優雅さを血のなかに継承していたことになる。だが、ワーキングガールが容易に上流階級に移動してなお気高さを発揮するという筋書は、労働者階級の読者に向けた作者の最大の配慮とみなすこともできる。ワーキングガールを上流階級の女性どころか、王女とさえ同一視し、その本質的価値を高く評価する言葉の数々が、階級の移動で証明されることになるからだ。遺産相続による地位と富の上昇は、上流階級の女性が絹の服やダイヤモンドの装飾品などで身を飾りながらも、粗末な服を着たワーキングガールの気高さにかなわないとする、作品でくり返されるメッセージの最後の仕上げとも解釈できよう。

ワーキングガールが遺産を相続し、工場から大邸宅への移動を果すということは、リビーのロマンスでくり返されるだけでなく、ジャーナリズムをにぎわす実際の事件としても存在していた。たとえば、1885年には、「女工、遺産相続人となる("A Mill Girl Becomes an Heiress")」という記事がストリート・スミス社の『ウィークリー』紙に掲載されている(Masteller 269-70)。その記事によれば、母親の死後ワーキングガールとなった、工場でも人気の美人が、25年間ゆくえ不明だった父親の遺産をとつぜん相続することになったが、彼女は自分の幸運に少しもうぬぼれることなく、あらゆる人から祝福されたという(70)。まさにリビーが書いたロマンスそのものの筋書で、ワーキングガールから遺産相続人へという夢のような出来事が、現実には起き得ることを知らしめるような記事だったのである。

記事が掲載されたこの新聞には、同時にスミ

スの「バーサ、ミシン踏みの娘」の改訂版が掲載され、ロマンスと現実との境界をぼやけさせるような戦略もとられていたという (Masteller 269-70)。このような戦略には、貧しい労働者階級の読者に金持になる夢をかりたてる目的とともに、現実離れした物語が読者の空想癖を募らせ、弊害をもたらすという中産階級の批判 (Hart 53-54) をかわす目的があったと思われるが、週刊新聞やダイムノベルの宣伝文にもたえずみられるものである (Noel 277; Carr 1)。リピーも、作品のなかで、物語と現実との境界を不明確にするような試みを意識的に行い、ワーキングガールが昼休みに読むような「壮大な恋愛小説」のようだが、「これは現実社会の出来事だ」(『可愛い向う見ずな娘』8) という類の説明をくり返している。中産階級の価値観を一部で反映させながら、労働者階級から上流階級への移動を果すヒロインを描いたリピーの作品が人気を得たのは、労働の現実とかけ離れた世界に思いを馳せ、そうすることで厳しい現実を乗り切ろうとしたワーキングガールの処世術と、そのような心理を熟知して作品を提供し続けた作者、ひいては出版界の商業的手腕が合致した結果であろう。

#### IV. 読者としてのワーキングガール

ワーキングガールが現実とかけ離れた世界に夢を馳せたということは、彼女たちの支援者であったジェニー・クローリイ (Jennie Croly) が、1883年、上院の教育と労働に関する委員会 (U.S. Senate, Committee on Education and Labor) で行った証言によっても明らかにされている。自らは中産階級の出身であったが、彼女はワーキングガールの娯楽についての質問に答えて、次のように語っている。

まず第一に、あの娘たちは座って本を読むことにあまり関心がありません。もし半日空いた時間がとれば、戸外に出て、空気を吸うこと望みます。読書に関して言えば、自分たちの日常とはきわめて異なっているものを求めますので、華美で安っぽい物語が掲載され

た物語新聞 (the story papers that contain flashy stories) に飛びつきます。お上品な貴婦人についての話で、そういう人たちが何着服をもっているとか、これ以上はないほど邪悪な殺人や刺激的な出来事について書かれたものです。それだからと言って、私はあの娘たちを非難することはありません。彼女たちは、自分たちの外の世界のものに夢中になるのです。それが、日々の生活の厳しい現実を忘れさせてくれるからです。(Denning 33)

ワーキングガールが日常とは異なるものを物語に求めたということは、リチャードソンの『長い一日』においても記録されている。中産階級出身のこの小説の主人公「私」は、地方から「立身出世を求めて」(30) ニューヨークに赴くものの、苦勞して得たのは製函工場の単純労働であったが、その初日に、そこで働く女工たちが自分とはまったく異なる読書傾向をもっていることに気づく。ワーキングガールが物語と呼ぶものは、リアリズムとは無縁のロマンスであることを発見し、労働者階級と中産階級との文化の違いを愛読書の違いによって認識するのである。

リピーの作品など、女工たちの愛読書を1冊も読んだことがないという理由で、彼女たちの驚きとからかいの対象になる「私」は、逆に自分の愛読書の一つ『若草物語 (Little Women)』(1868) を紹介すると、女工の一人は、「そんなの、ぜんぜんストーリーじゃない」(86) と答える。『若草物語』のプロットは、ワーキングガールには「普段の出来事」にしかすぎず、その登場人物は「ほんとうに生きている人みたいで」「このうえなくありきたりで」(86) 読むに値しないというわけだ。「私」は、女工たちの愛読書が「夢をみて、語れるもの」(74) でなくてはならず、彼女たちが昼休みなどに読んだロマンスの内容を仕事中に仲間と語り合うことで、夢を共有していることを知るのである。現実には、「一生懸命に仕事をする、汗にまみれた恋人」がいる場合もあるのだが、女工たちは、現実離れしたリピーのロマンスそのままの、「銀行家や工場主が自分たちと同様の貧しい賃金労働者に求婚し、愛を勝ち得て立派

に結婚する」(74) という話を仲間同士で語り合うことに興じているのである。

ここで注目すべきは、ワーキングガールが金持の男性と結婚するというパターン化したリビーのロマンスが、読者のワーキングガールに、「何が望ましいか、どういう人に憧れるべきか、という羨望のルール」(和田 75) を示していることである。『長い一日』に登場するワーキングガールの一人は、主人公「私」の読書傾向が自分たちのそれと異なる理由として、地方と都市との文化の違いをあげ、『若草物語』のようなリアリズム小説を好むのは地方の「農家の人びと」であり、彼らは自分たち都市居住者のように「なんでも同じスタイルのもの」(86) を愛好することに慣れていないのだと主張している。リビーをはじめとする流行作家のロマンスを愛読するのは、地方とは異なる都会の文化である、ということである。

この発言は、階級によって読者の好みに差異が生し得るという点は逸しているものの、一つの重要な問題を提起している。それは、都市で働くワーキングガールが同じロマンスを読み、その内容を共有することで「夢みる規則」を了解しあった幻想のコミュニティを作り(和田 77)、そこに読み手が浸ってゆく快樂を感じていたことを明らかにしている点である。ワーキングガールから遺産相続人になり、さらに工場主の息子など金持と結婚するという話をくり返し書いたリビーは、ニューヨークで働く女工たちに「夢みることのマニュアル」(77) を指し示したといえよう。中産階級出身の『長い一日』の主人公が、ニューヨークの製函工場で受ける衝撃は、ワーキングガールが同じロマンスを読み、夢を共有することでワーキングガールたり得るということであり、そうすることで、ワーキングガール特有の文化を形成しているということだったのである。

「夢みる規則」を了解しあった『長い一日』の女工たちは、自分が読んだ気に入りのロマンスのヒロインの名を名乗り、その登場人物になりきることで、さらに幻想の度合いを深めてもいる。工場で働き始めたときから、女工たちは「仰々しい名前を名乗るにお金もかからない」(97) とばかりに、それぞれ読んだ物語からとった名前を職場

で名乗っているのである。なかには、ヒロインの人生を自分の人生と混同するほど幻想を深める女工もいて、彼女はリビーの小説のなかで起こるような出来事を、そのまま自分の身の上として話し、読書行為によって築いた幻想に浸る快樂から抜けでることができない。リビーのロマンスは、現実離れた出来事を描きながらも、現実の出来事であることをくり返し強調しているが、それを読む女工のなかには、物語と現実との区別がなくなってしまう場合もあったということである。このような女工がいたということは、逆にいえば、現実が直視するには耐えられないほど厳しかったということでもあろう。

ジャニス・ラドウェイ (Janice Radway) によれば、ロマンスの読者は、読書行為によって外の世界との関係をすべて一時的に遮断することを許され、厳しい現実に向き合うエネルギーを得るという(46-118)。彼女の研究は、ロマンスを読む読者の心理を面接やアンケートを実施して分析したもので、テキスト分析のみに頼っていた従来のロマンス研究に比して、ロマンスを読む女性読者を分析した点で画期的であるが、現実離れたロマンスが、読者に厳しい現実からの逃避や新たな希望への活力を保障するものであることを明らかにしている。20世紀のロマンス読者を対象とした研究ではあるが、リビーのロマンスを愛読した19世紀のワーキングガールたちにもそのまま当てはめることができるものである。

『長い一日』では、製函工場のワーキングガールが、30分ほどの昼休みに急いで食事をする時、箱の間にこっそりと入り込み、隔離された空間でペーパーバックのロマンスを読みふける様子が描かれている。読者が物語と個人的に向い合うこのシーンは、たとえば、家族の一人が音読し、それを一家で聞くというような、それ以前の大衆小説の読書法と比べると (*News* 8)、読書行為が個人のひそかな楽しみとなっている点で、「近代読者の成立」を思わせる(前田 166-210)。隔離された場所で一人黙読するワーキングガールは、機械がふたたびうなり声をあげて午後の仕事が始まり、現実世界に引き戻されるまで、目の前の現実とかけ離れた物語世界の居住者たり得るというこ

とである。それは同時に、現実からの飛躍の多いロマンスが、読み手としてのワーキングガールに、一時的に外的な抑圧からの解放を保障していることを示しているといえるだろう。

リビーの物語は、偶然の出会いから苦難を経て結婚で終結するが、この展開は、ヒロインが巻き込まれる事件の非現実性や彼女の受動性などとあわせて、ピーター・ブルックス (Peter Brooks) のかかげるメロドラマの定義にかなうものでもある (11-12)。だが、この幸せな結婚で終るといふ展開こそが、リビーの小説が当時のワーキングガールに一時的にせよ厳しい現実を忘れさせ、はるかな世界への夢をかりたてる最大の要素であったといえよう。男性労働者と競うような仕事も与えられず、彼らよりも、改善や向上の機会に乏しい、技術をもたない女性労働者にとって、とくに結婚にかわるゴールがもちにくく、大方は、仕事を人生の一時期の「不運な方便」としてとらえていたといわれるからである (Kleinberg 132; Katzman 37)。そのために組合活動などに参加する工場労働者も少なく、少しでも豊かな男性との結婚こそが、厳しい労働からの脱出する手段とみなしていたという (Kleinberg 129)。読者としてのワーキングガールは、苦難はあっても必ず幸せな結婚にたどり着くりビーのヒロインに容易に感情移入できたのであろう。

社会改革者や労働組合の指導者は、ワーキングガールがリビーの小説を読むことを否定的にとらえていたといわれ (Enstad 49)、リチャードソンも『長い一日』の終結部で、読者に「すべてを歪曲させ、誤った考え」(300)を植えつける物語と断定している。だが、上流階級の貴婦人にあこがれ、中産階級の生活様式を真似ることにささやかな希望を見いだしていたワーキングガールにとって (Kleinberg 125, 129)、次つぎと襲いかかる苦難をも生き延び、初恋を实らせるリビーのヒロインは、直面する抑圧からの解放を具体的な形で表象していたといえるだろう (Enstad 73)。工場近くの馴染みの路上で見初められるという現実感を一部で帯びながらも、上流階級の男性との結婚という現実との距離感がロマンスという枠組みで敷衍されて読者の夢をかりたて、現実の厳しさを忘

れさせる強力な鎮痛剤の効果を発揮したことが想像されるのである。

このことは、ポーランドからアメリカに移民してニューヨークのワーキングガールとなったサディ・フローン (Sadie Frowne) の記録「スウェットショップ・ガールの話 (“The Story of a Sweatshop Girl”」(1902)によっても実証されている。『インディペンダント (*Independent*)』紙に掲載されたこの記録において、彼女はブライムのロマンスを読んだ感想として、「ものごとがまさに現実に起こったように示され、自分が金持の公爵と結婚する貧しい娘のように感じる」(56)と書いている。早朝から夕方まで「狂ったように機械を動かし」(56)、怪我する危険のなかで仕事をしてきたワーキングガールが、わずかな空き時間に読書をして上流階級の金持と結婚するヒロインに自己を同化させる姿は、ロマンスが現実からの逃避にとどまらず、生きる希望さえ与えていたことを示しているといえよう<sup>5)</sup>。

ポーランド移民であったフローンにとって、上流階級の金持と結婚する貧しい女性についてのロマンスを読むことは現実逃避や生きる希望であったと同時に、英語を学ぶ手段の一つでもあった。彼女は、仕事の合間に夜学に行って英語の読み・書きなどの基礎を学び、アメリカへの定着への過程で新聞やロマンスを読んだのである。

リビーの小説なども、同様の目的で移民たちに読まれていたことが彼らの自伝などからうかがえる。たとえば、ロシアの寒村から12歳でアメリカに移民し、ロウアー・マンハッタン (Lower Manhattan) の「お針子」となったローズ・コーエン (Rose Cohen) の自伝的記録では、「読むことは必要であり、娯楽であった」(191)と書かれ、娯楽の少ないワーキングガールにとって、読書が生活の重要部分を占めていたことが明らかにされている。幼い女性移民労働者が読書によって自己確立していく経緯が鮮やかに描かれ、読んだ物語の登場人物に自己を投影して楽しむ様子はもとより、英語の本を読めるようになることでアメリカ定着への足がかりをつかむ様子が実体験のインパクトをもって迫る。貧しいロウアー・イーストサイド (Lower East Side) の移民たちを援助

するセトルメントで、移民の少女ルースは、ボラ  
ンティアの女性にリビーのロマンスらしきものを  
紹介され、それを読むことでアメリカ定着への道  
を歩みだしている。

彼女はついに小さな一冊の本を私に差しだ  
し、にっこり微笑んであの朗々とした声で言  
った。「ルース、これ、甘い恋愛小説よ、読  
んでみて」。それで私はその本をもちかえっ  
た。題名は覚えていないし、聖書ではなかつ  
たけれど、さしあたり、私はその本に満足し  
た。実際、今の自分にとってそれは満足を与  
えてくれる以上のものであり、喜びをもたら  
してくれるものであった。というのも、その  
本は、一風かわったくだらないものかもしれ  
ないけれど、今、自分が何か読むことができ  
るとは思わなかったからだ。私は英語の本を  
読めることをとても誇りに思い、それを持っ  
て通りを歩きまわった。工場にももっていっ  
た。私は上得意になった。ときどき、通りを  
歩いているときなどあたりを見まわし、私は  
ここの人間ではないのだと思っていた。以前  
のようにここの一部ではないのだと感じてい  
た。でも、たちまち、私が所属しているのは  
ほんとうにここなんだ、と思わせてくれる何  
かを感じた。(249-50)

リビーが1880年代、90年代にワーキングガ  
ール向けの恋愛小説を大量に出版していたことを考  
えれば、ここで言及されている作品が、彼女の恋  
愛小説であった可能性は高い。リチャードソンの  
『長い一日』のヒロインのように、教育を受けた  
中産階級の出身者には、「くだらない、くずのよ  
うな作品」となるかもしれないが、英語を学ぶ過  
程の移民の労働者には、アメリカでの生き残りを  
手助けするものでもあったということであろう。  
移民の少女は、この後、夜学に通ってさらに英語  
を学ぶ決意をしているのである。

コーエンの自伝的作品では、当時のニューヨ  
ークで、ワーキングガールがどのように本を手  
にいったかということも明らかにされている。飲  
み物売るスタンドなどでは、15セントを保証

金として納めれば、1冊5セントで貸し出しもし  
ていたようである(187)。当然、購入すること  
も簡単で、職場近くの屋台や新聞スタンドなど  
で、ダイムノベルを手に入れることができたとい  
う(Enstad 52-53)。20世紀初頭のロウアー・イ  
ーストサイドには、ユダヤ人、イタリア人、ギリ  
シア人などの移民による屋台が約2500も並び、  
生活のありとあらゆるものを売っていたが、本も  
その主要商品だったといわれる(52-53)。ワー  
キングガールにとっては、本を買う行為そのもの  
も娯楽であり、彼女たちは、交通費や食費を節約  
して本を手に入れたという(Peiss 52-53)。ロマ  
ンスを買って読む、あるいは借りて読むというこ  
とは、アメリカ生まれの娘にとっても、移民の娘  
にとっても、過酷な仕事をして生き抜くというワ  
ーキングガールとしての厳しい生存競争を支える重  
要な行為であったといえるだろう。

## V. ロマンズのメディア性

ワーキングガールがロマンスの主人公として取  
りあげられるようになった要因の一つとして、彼  
女たちの話題が同時代の活字メディアを賑わして  
いたことはすでに述べたが、ロマンス自体が読者  
に対してメディア性を発揮していたことも指摘し  
なければならない。厳しい労働条件のなかで働く  
女性の数が記録的に増え、労働者階級的生活実態  
がめだって社会の問題となりつつあった当時のア  
メリカを、リビーの小説が反映していることは事  
実であるが、その小説が意味するものは、そうし  
た単純な反映論だけにとどまるものではない。社  
会の問題を反映しているものとして読むだけなら  
ば、時代的な資料の断片になってしまうが、小説  
の内容自体が、メディアの一部として機能してい  
たことは確認されなければならない。

そうしたメディア性を発揮しているものとし  
て、まず指摘しなければならないのは、リビーの  
平易な文体である。それが、移民のワーキング  
ガールたちにアメリカ定着を促進する英語学習に  
役立ったばかりでなく、アメリカ生まれの娘たち  
にとっても、読書への壁を低くする効果があっ  
たと思われるのである。ワーキングガールの物

語には幼い労働者がよく登場するように、義務教育の徹底化が進んだ当時のアメリカであっても<sup>6)</sup>、多くの娘たちが十分な教育を受けないまま、労働現場にかりだされていた事実があるからだ (Wertheimer 338)。読みやすくするための工夫は、各章を短くして展開を早くするというようなところにもみられるが、平易な語や短い単文の多用などによる文体はそのような工夫の最たるものといえるだろう。移民の読者にしても、アメリカ生まれの読者にしても、リビーの文体は、それ自体が英語教材になっていたという点で、きわめて有効なメディア性をもっていたといえよう。

リビーのテキストのもつメディア性としては、その標準英語についても指摘すべきであろう。リチャードソンの『長い一日』やイーディス・ウォートン (Edith Wharton) の『歓楽の家 (*The House of Mirth*)』(1905)などに登場する女性労働者は、リアリズムに徹してスラングや方言などを用いているが、リビーのワーキングガールは、現実とは異なりつねに標準語を話す。これは、中産階級出身のリビーが労働者階級の世界に精通していなかったということでもあろうし、女工の「気高さ」を強調するため、あえて標準語を用いたとみることもできるのだが、読者のワーキングガールには、彼女たちが通常使用している言語とは異なる中産階級や上流階級の人びとが話す言語を示すことになったといえるだろう。

リビーのテキストが示すメディア性は、女性労働者の関心事をふんだんに盛り込み、それらを読者としての彼女たちに向けて発信したことにも表われている。リチャードソンは『長い一日』で、工場働くワーキングガールの関心事が「ドレス、お決まりの仮装舞踏会、殺人、火事」(73)であったと述べているが、リビーの小説が扱ったのは、まさにそのような話題である。とくに上流階級の人びとのファッションや舞踏会の様子、そしてヒロインが巻き込まれる擬似殺人などは、リビーの小説の中心を成すものであり、それらはきわめて意識的に提示されているといえよう。

たとえば、『レオニー・ロック』では、主人公レオニーの「濃い青色のこざっぱりとした服に同じ素材のジャケットと、それにマッチした布製の

帽子」(7) というその身なりが作品冒頭で詳しく説明され、それが後に登場する上流階級出身の恋敵の絹やダイヤモンドで着飾った身なりと対比されている。この対比が意味するのは、高価なファッションに身を包んだ上流階級の「お嬢様」に負けない美しさや品のよさを、粗末な服を着た「ただのワーキングガール」が備えていることを強調するためである。レオニーは、メリノ製の青い服を着ているときに工場主の息子に見初められて結婚にいたるが、夫は「ただのワーキングガールにすぎない」とわかるファッションに身を包んだ彼女がもっとも美しいと主張して、結婚後も大邸宅にその姿を描いた絵を飾っている。小説は、ワーキングガールが金持の男性を射とめるためのファッションを読者に例示しているといえるだろう。

リビーの小説は、このようなワーキングガールのファッションを詳細に示すだけでなく、フランスの一流デザイナーによる「このうえなくすばらしく高価な」(135) ファッションも紹介している。レオニーが遺産相続人になり、上流階級への移動を果たした後は、彼女自身が、最高級のドレスを着るシーンも用意されている。オートクチュールの基礎を築いたといわれる高名なパリのデザイナー、シャルル・ヴォルト (Charles Worth) の最新ドレスを着て舞踏会にいくくだりでは、素材から刺繍のデザインや宝石のあしらい方まで詳細にわたって説明されているのである。ワーキングガールたちは、労働市場において衣服が性格よりも重要な意味をもつことを経験から知り抜いており、なかには給料の4分の1を衣服にかける女性もいるほどファッションに高い関心をもっていたといわれる (Enstad 62)。リビーの小説は、彼女たちのそのような関心を満足させるべく、ワーキングガールの通勤着から当時の最新最高のオートクチュールまで、ファッション情報をたくみに盛り込んでいたといえよう。『ローラ・シリーズ』を出版したストリート・スミス社は、ファッションがワーキングガールにいかに重要な意味をもつかを理解し、その表紙に華やかなドレスを着たレビー自身の写真をあしらってもいたのである<sup>7)</sup>。

殺人事件の話題は、ワーキングガールの主要な関心事だったといわれるが、リビーの小説では、

嫉妬や復讐をめぐる殺人未遂事件が次つぎと起き、当時のセンセーショナルな新聞記事と同じような展開をみせている。また、そのような事件が活字メディアをとおして展開するということがみられる。たとえば、レオニーの恋敵は、自分が愛する男性の関心がレオニーにあることを確信するとその美しい顔を傷つけようと策を練るが、そのヒントを新聞によって得ている。自分が観た演劇のなかで使用されていたフランス製の特殊な毒薬についての情報を得るために、主要日刊新聞社の一つに向いて、過去の劇評を調べている。そのような情報を得る女性に対して、世間を驚かせるような記事を書こうと、「美しい女性と嫉妬に狂った夫、または恋人をめぐるきわどいスキャンダル」(123)を求める新聞記者なども登場し、ワーキングガールの関心事が新聞によって作られていることが明らかにされている。リビーの小説では、新聞の求人広告を見て仕事に応募する、求職広告をだして仕事を得るなど、ワーキングガールの通常の暮らしに新聞が密着している様子が描かれ、ヒロインは最初に登場するときから新聞を抱えているのだが、そのもっとも密着していた部分は、小説がスキャンダルを扱う新聞記事と同様のセンセーショナルリズムに徹している点であろう。恋愛をめぐる嫉妬と復讐が交錯する人間模様を描き、それが殺人未遂までに発展するテキストは、それ自体が、当時の記事と同様の内容を有していたといえるだろう<sup>8)</sup>。

リビーの小説と新聞との類似性は、内容だけにとどまらず、その構成にもみられ、その特徴は、「事件性」と「連続性」という語に集約される。「事件性」とは、遺産相続など、人生が一変するような稀有なことが突発的に起こることであり、これはプロットの上から考えれば、ロマンスの展開が一瞬にして変化し、その展開に「スピード」感をもたらすものでもある。また、「連続性」とは、誘拐・監禁・殺人未遂という同様の事件がくり返され、鎖のように次つぎと事件がつながっていくということであり、同様にプロットの上では、展開の「遅延」を保障するものとなる。リビーのテキストは、新聞というメディアが報道するような、あり得ないことがとつぜん起こる「事件

性」と、同様の事件が毎日くり返される「連続性」とが絶妙に交じり合って構成されているといえることができる。テキスト自体が、新聞による事件報道のように構成されているということであり、読者にとっては、新聞を読むのと同様のメディア性を有していたといえるだろう。

リビーの小説がセンセーショナルな新聞と同様のスキャンダルを扱いながらも、新聞と異なるところは、ヒロインがそのようなスキャンダルに汚されることなく生き抜き、必ず「幸せな結婚」にたどりつくメロドラマとして成立している点であろう。殺すか殺されるかというサスペンスに満ちていながら、結局はそのいずれもすり抜け、絶対的な幸せをつかむヒロインを描く物語は、読者のワーキングガールにとっては、新聞記事のスキャンダルより魅力的な読物であったことが容易に想像できる。ワーキングガールがとつぜん遺産相続人になるというケースが当時の新聞でも報道されていたことはすでに述べたが、リビーの小説は、金ばかりか愛をも手に入れるヒロインを描くことで、読者のワーキングガールには、「幸せになり方」の模範を示すという意味で、新聞記事が提供する以上のメディア性を提供していたともいえよう。

20世紀のアメリカ文学史は、リビーと同時代のニューヨーク・ワーキングガールを描いた作品として、クレインの『マギー』を取りあげてきた。ニューヨークの貧民街に生まれたその主人公マギーは、「汚い泥水のなかで咲いた花」にたとえられる「美しい娘」(16)に成長して工場で働き始めるが、やがて恋して捨てられたあげく、売春婦となって自殺する。環境が人間に与える影響を描いたアメリカ自然主義文学の代表的な傑作として、アメリカ文学史のキャンソンの一部を形成してきたのである(Van Doren 228-32; Spiller 152-53)。一方、リビーの小説は、文学史で取りあげられることがないばかりか、その存在自体もあまり知られていなかった。生前は女性労働者の絶大な支持を受けていた彼女も、その死後、映像メディアの発達にともなって大衆の娯楽が映画などに移り、その名前さえも忘れられていったのである。

だが、クレインとリビーの同時代を生きていたワーキングガールが、いずれの小説を娯楽として選んだかということは容易に想像できる。長時間の重労働に耐えながらも生きる糧を得ることさえ難しかった彼女たちにとって、クレインが書いた売春婦になって自殺するワーキングガールの話は、あまりにも現実的で、読むことが娯楽や慰めになるどころか、試練となったことは明白であろう。加藤幹郎は、『愛と偶然の修辞学』で、メロドラマを「自分の意志を表明する資格、権利、能力、機会を奪われた人びとのために、その資格、権利、能力、機会を回復しようとする物語のジャンル」(100)と定義しているが、リビーの小説が同時代のワーキングガールに果たした役割をこれ以上明確に説明するものはない。社会の底辺で、厳しい生存競争を闘っていた当時のワーキングガールには、リビーの小説が、彼女たちの自己存在を回復する手助けとなる読物となったということである。

## 注

- 1) 本稿は、日本アメリカ文学会東京支部(2007年9月27日、於慶応大学)における発表に加筆修正を施したものである。当日、司会をお務めくださった慶応大学教授の宇沢美子先生をはじめ、多くの出席者の方々から賜った貴重なご意見に有形無形のインスピレーションを受けた。ここにその旨を記し感謝の意を表する次第である。
- 2) リビーの小説はすべてワーキングガールを主人公にしたものではなく、その多くは中流・上流階級の女性についての物語であるが(Cox 158)、たとえば『いたづらなメイドフェイニー (Mischievous Maid Faynie)』などの例にみられるように、上流階級の無垢な娘が貧しい労働者と恋する物語においても、他の登場人物をとおして女性が賃金労働に就くことが礼賛されている(98)。
- 3) 「労働騎士団 (Knights of Labor)」とは、1869年にフィラデルフィアで結成された労働団体で、正式には「高潔神聖労働騎士団 (Noble and Holy Order of the Knights of Labor)」という(Wertheimer 182; 長沼 26)。1862年に組織された衣服裁断工の組合が解散するときに一部の秘密団体が作った組織に由来しているといわれ、多様な職種の熟練工、非熟練工のみならず女性や黒人労働者の参加も許されたが、中国人労働者だけは参加を許されなかったという(Wertheimer 182-83; 長沼 26)。
- 4) リビーの作品では、プロットがパターン化されているだけでなく、同じ文章なども、異なった作品に頻出する。たとえば、「真実の愛への道は平坦ではない」という表現は、『アイオーネ』においてもくり返されている(205)。
- 5) 『歓楽の家』に登場する女工は、上流階級の女性についての記事を読むことが生きる希望につながったとつぎのように述べている。「ときどき、自分がほんとうにみずほらしく思えて、どうして世の中って物事がこんなに変な風になっているんだろうって思い始めると、きまって思い出していました。『あなた』はともかくも楽しい思いをなさっていて、正義のようなものがどこかにあるってことを見せようとしていたみたいだって」(313)。
- 6) リビーの小説がワーキングガールに広く読まれたということは、女性労働者の識字率が高かったということでもある。19世紀アメリカにおける識字率の研究によれば、コモン・スクール(公立学校)などの教育改革が進められ、南北戦争後、義務教育の徹底化に向けた法律が整備されたことが文盲率の低下に大きく寄与したという(Soltow 51; Denning 31)。
- 7) たとえば、『ローラ・シリーズ』第7号『向う見ずな娘ラディ』のピンク色の表紙には、肌の露出の多いイヴニング・ドレスを着て、長い手袋をはめたリビーの椅子に座った写真があしらわれている。
- 8) デイヴィッド・S・レナルズ(David S. Reynolds)は、アメリカン・ルネッサンス時代の新聞報道と文学との関係を詳しく論じている(169-210)。

## 引用文献

- Aron, Cindy Sondik. Introduction. Richardoson ix-xxxvii.
- Baym, Nina. *Novels, Readers, and Reviewers: Responses to Fiction in Antebellum America*. Ithaca: Cornell UP, 1984.
- . *Woman's Fiction: A Guide to Novels by and about Women in America, 1820-70*. Ithaca: Cornell UP, 1978.
- Bisno, Abraham. *Abraham Bisno, Union Pioneer*. Madison: U of Wisconsin P, 1967.
- Brooks, Peter. *The Melodramatic Imagination: Balzac, Henry James, Melodrama, and the Mode of Excess*. New Haven: Yale UP, 1976.
- Carr, Felicia Luz. *All for Love: Gender, Class, and the Woman's Dime Novel in Nineteenth-Century America*. Diss. George Mason U, 2003. Ann Arbor: UMI, 2003. 3079392.
- Cohen, Rose. *Out of the Shadow: A Russian Jewish Girlhood on the Lower East Side*. 1918. Ithaca: Cornell UP, 1995.
- Cox, J. Randolph. *The Dime Novel Companion*. Westport: Greenwood, 2000.
- Crane, Stephen. *Maggie: A Girl of the Street*. 1893. New York: Norton, 1979.
- Denning, Michael. *Mechanic Accents: Dime Novels and Working-Class Culture in America*. London: Verso, 1998.

- Dobson, Joanne. Introduction. Southworth xi-xlv.
- Enstad, Nan. *Ladies of Labor, Girls of Adventure; Working Women, Popular Culture, and Labor Politics at the Turn of the Twentieth Century*. New York: Columbia UP, 1999.
- Foster, Charles. *Bertha, the Sewing Machine Girl*. 1871. Brooklin, ME: Feedback, 1998.
- Frowne, Sadie. "The Story of a Sweatshop Girl: Sadie Frowne." Katzman and Tuttle 47-57.
- Grimes, Mary C., ed. *The Knights in Fiction: Two Labor Novels of the 1880s*. Urbana: U of Illinois P, 1986.
- Hale, Sarah Josepha. *Woman's Record; or, Sketches of All Distinguished Women, from the Creation to A.D. 1854*. New York: Harper, 1855.
- Hapke, Laura. *Tales of the Working Girl: Wage-Earning Women in American Literature, 1890-1925*. New York: Twayne, 1992.
- Hart, James D. *The Popular Book: A History of America's Literary Taste*. Berkeley: U of California P, 1948.
- Hill, Joseph A. *Women in Gainful Occupations 1870 to 1920: A Study of the Trend of Recent Changes in the Numbers, Occupational Distribution, and Family Relationship of Women Reported in the Census as Following a Gainful Occupation*. Westport: Greenwood, 1978.
- Howe, Daniel Walker. "American Victorianism as Culture." *American Quarterly* 27 (1975): 507-32.
- Johannsen, Albert. *The House of Beadle and Adams and Its Dime and Nickel Novels: The Story of a Vanished Literature*. Vol. 1. Norman: U of Oklahoma P, 1950.
- Katzman, David M., and William M. Tuttle, Jr. *Plain Folk: The Life Stories of Undistinguished Americans*. Urbana: U of Illinois P, 1982.
- Kessler-Harris, Alice. *Out to Work: A History of Wage-Earning Women in the United States*. Oxford: Oxford UP, 1982.
- Kleinberg, S. J. "Success and the Working Class." *The Journal of Popular Culture* 2.1 (1979): 123-38.
- Libbey, Laura Jean. *Ione: A Broken Love Dream*. New York: Dillingham, 1893.
- . *Leonie Locke; or, The Romance of a Beautiful New York Working-Girl*. 1884. London: Milner, n.d.
- . *Madcap Laddy, The Flirt, or, The Favorite of the Beaux*. New York: Street & Smith, 1897.
- . *Mischievous Maid Fynnie*. Charleston: Biblio Bazaar, 2006.
- . *Only a Mechanic's Daughter, A Charming Story of Love and Passion*. New York: Ogilvie, 1892.
- . *Pretty Madcap Dorothy; or How She Won a Lover*. Cleveland: Arthur Westbrook, 1891.
- Masteller, Jean Carwile. "Romancing the Reader: From Laura Jean Libbey to Harlequin Romance and Beyond." Sullivan and Schurman 263-84.
- Mitchell, Sally. *The Fallen Angel: Chastity, Class and Women's Reading, 1835-1880*. Bowling Green: Bowling Green University Popular Press, 1981.
- News Stories & Notices 1852-1865*. 11 Oct. 2005<<http://Jefferson.village.virginia.edu/cogo-bin/nph-dweb.1852/utc/responses/notice>>.
- Noel, Mary. *Villains Galore: The Heyday of the Popular Story Weekly*. New York: Macmillan, 1954.
- Papashvily, Helen Waite. *All the Happy Endings: A Study of the Domestic Novel in America, the Women Who Wrote It, the Women Who Read It, in the Nineteenth Century*. New York: Harper, 1956.
- Peiss, Kathy. *Cheap Amusements: Working Women and Leisure in Turn-of-the-Century New York*. Philadelphia: Temple UP, 1986.
- Peterson, Joyce Shaw. "Working Girls and Millionaires: The Melodramatic Romances of Laura Jean Libbey." *American Studies* 24 (1983): 19-35.
- Radway, Janice A. *Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1984.
- Reynolds, David S. *Beneath the American Renaissance: The Subversive Imagination in the Age of Emerson and Melville*. Cambridge: Harvard UP, 1988.
- Richardson, Dorothy. *The Long Day: The Story of a New York Working Girl*. Charlottesville: UP of Virginia, 1996.
- Riis, Jacob A. *How the Other Half Lives: Studies Among the Tenements of New York*. New York: Penguin, 1997.
- Siegel, Adrienne. *The Image of the American City in Popular Literature 1820-1870*. Port Washington, N. Y.: Kennikat, 1981.
- Smith-Rosenberg, Carroll. *Disorderly Conduct: Visions of Gender in Victorian America*. New York: Oxford UP, 1985.
- Soltow, Lee, and Edward Stevens. *The Rise of Literacy and the Common School in the United States: A Socioeconomic Analysis to 1870*. Chicago: U of Chicago P, 1981.
- Southworth, E.D.E.N. *The Hidden Hand: or, Capitola the Madcap*. 1888. Ed Joanne Dobson. New Brunswick: Rutgers UP, 1996.
- Spiller, Robert E. *The Cycle of American Literature: An Essay in Historical Criticism*. New York: Free, 1955.
- Sullivan, Larry E., and Lydia Cushman Schurman, eds. *Pioneers, Passionate Ladies, and Private Eyes: Dime Novels, Series Books, and Paperbacks*. New York: Haworth, 1996.
- Van Doren, Carl. *The American Novel: 1789-1939*. New York: Macmillan, 1940.
- Veblen, Thorstein. *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study of Institutions*. 1899. London: Allen, 1922.
- Welter, Barbara. "The Cult of True Womanhood: 1800-1860." *American Quarterly* 18 (1966): 151-74.
- Wertheimer, Barbara Mayer. *We Were There: The Story of Working Women in America*. New York: Pantheon, 1977.
- Wharton, Edith. *The House of Mirth*. 1905. New York: Scribner's, 1933.
- Whittaker, Frederick. *Larry Locke, Man of Iron, or, A Fight*

- for Fortune: A Story of Labor and Capital*. 1884. Grimes 135-326.
- Willis, Sara Payson. "The Working-Girls of New York." *American Literature*. Vol. 1. Ed. Emory Elliott et al. Englewood Cliffs: Prentice, 1991. 1742-43.
- 堀啓子 「『金色夜叉』の藍本—Bertha M. Clayをめぐる—」『文学』Nov.-Dec.2002: 188-201.
- 加藤幹郎 『愛と偶然の修辞学』勁草書房 1990.
- 長沼秀世 『アメリカの社会運動 CIO史の研究』彩流社 2004.
- 野口啓子・山口ヨシ子編著 『アメリカ文学にみる女性と仕事 ハウスキーパーからワーキングガールまで』彩流社 2006.
- 和田敦彦 「読書行為と雑誌表現—『婦人画報』の夢見る規則—」『文学』July 1994: 74-84.